

# Gno G-let

グノレット

vol.5  
2011年8月発行

中学生・高校生の保護者の方へ

**入室テスト [9月5日(月) 授業開始]** 中1生~高3・受験生

**新宿本館** 無料・電話にてご予約ください。03-5371-5487

**8/26** (金)、**27** (土)、**28** (日)、**29** (月)  
11:00~、または14:00~

※ご都合の良い日程・時間をお選びください。 渋谷本館で受講を希望される場合も、新宿本館で入室テストをお受けください。

## 2011年 大学受験合格実績 第5期 在籍311名

### 東大各教科類

理科I類	25名
理科II類	10名
理科III類	1名
文科I類	12名
文科II類	8名
文科III類	6名

東京大  
**62名**

国公立慶医  
**39名**

### 医学部医学科106名

東京医科歯科大(医)	1名
東北大(医)	1名
千葉大(医)	4名
北海道大(医)	1名
横浜市立大(医)	3名
筑波大(医)	5名他
※国公立大医計33名	

### 国公立大138名

京都大	4名
一橋大	8名
東工大	5名
東外大	6名他

慶應大  
**141名**

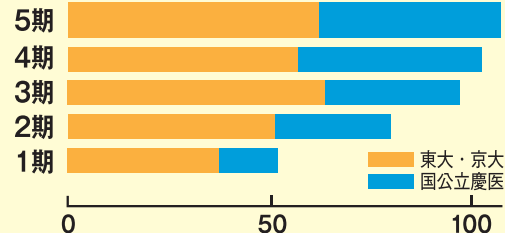
早稲田大  
**148名**

上智大  
**48名**

慶應大(医)	6名
東京慈恵大(医)	8名
順天堂大(医)	10名
日本医大(医)	8名
昭和医大(医)	7名他
※私立大医計73名	

東大・京大  
+  
国公立慶医  
合格実績

5期在籍311名中**105名**  
4期在籍307名中**102名**  
3期在籍271名中**99名**  
2期在籍232名中**79名**  
1期在籍187名中**52名**



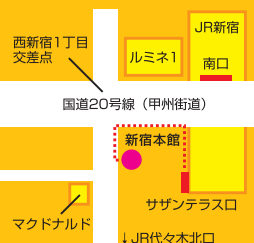
### 新宿本館・受付

〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

お問い合わせ  
**03-5371-5487**

交通: JR新宿サザンテラス口徒歩1分  
JR代々木北口徒歩5分

受付時間: 月~金曜日 15:30~21:00  
土曜日 14:00~21:00  
日曜日 休み



### 渋谷本館・受付

〒150-0043 渋谷区道玄坂1-9-4 ODAビルディング2F

お問い合わせ  
**03-5459-7805**

交通: JR渋谷西口 徒歩2分

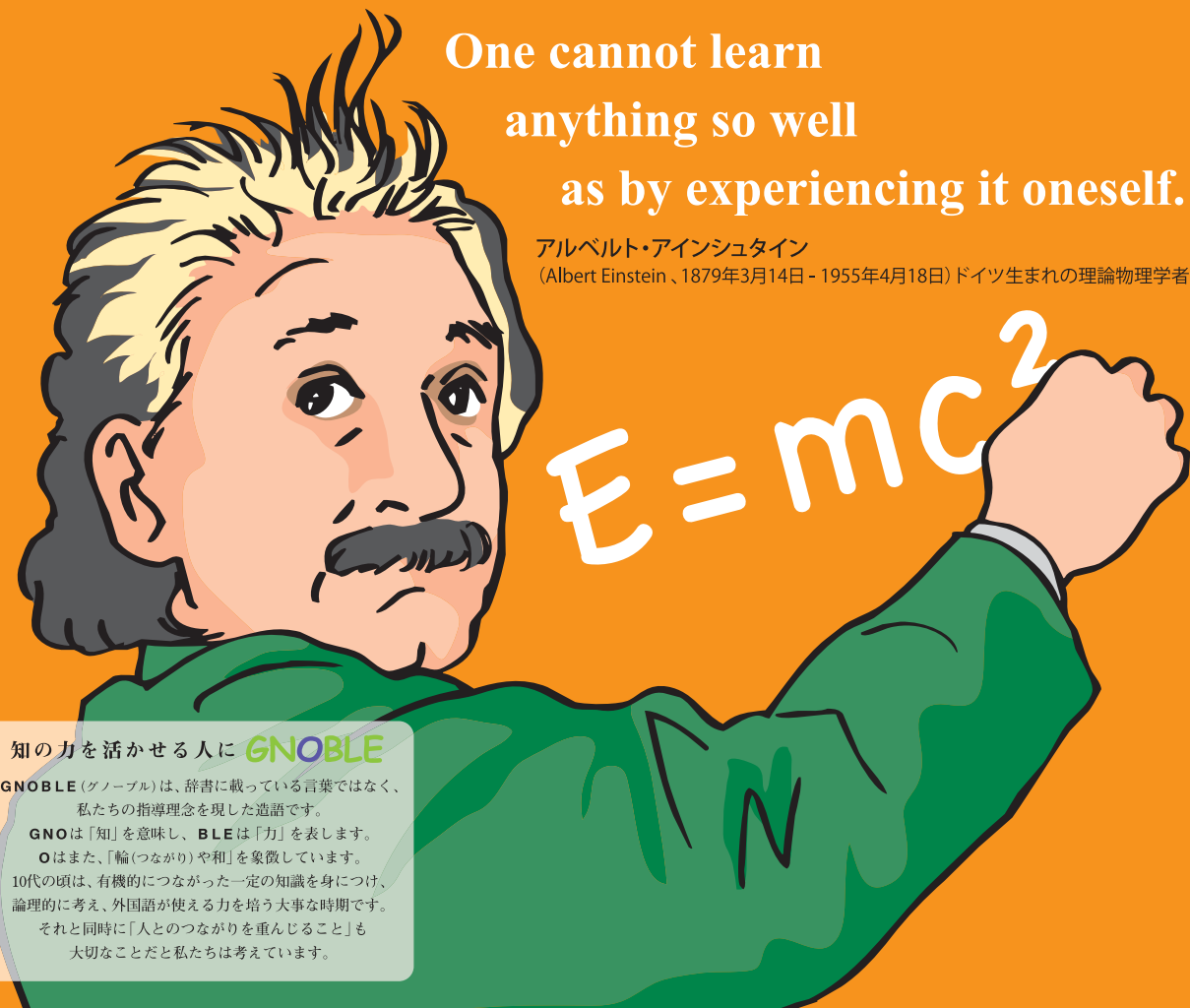
受付時間: 月~金曜日 15:30~21:00  
土曜日 14:00~21:00  
日曜日 休み



One cannot learn  
anything so well  
as by experiencing it oneself.

アルベルト・アインシュタイン

(Albert Einstein, 1879年3月14日 - 1955年4月18日) ドイツ生まれの理論物理学者



知の力を活かせる人に **GNOBLE**

GNOBLE (グノーブル) は、辞書に載っている言葉ではなく、  
私たちの指導理念を現した造語です。

GNOは「知」を意味し、BLEは「力」を表します。  
Oはまた、「輪(つながり)や和」を象徴しています。  
10代の頃は、有機的につながった一定の知識を身につけ、  
論理的に考え、外国語が使える力を培う大事な時期です。  
それと同時に「人とのつながりを重んじる」ことも  
大切なことだと私たちは考えています。

**グノOB緊急座談会** 『受験時代とグノ、そして今の僕たち』(前編)

**GSL** (グノーブル独自開発音声教材)  
音録り現場ルポ

2011年 東大理科III類合格 安田陽平くん執筆  
『僕はこうして理Ⅲの門をくぐった!  
勉強法大公開』第1回

知の力を活かせる人に **GNOBLE** グノーブルにアクセス。東大にアクセス。  
東大・医学部・早慶 難関大学の受験指導 [www.gnable.co.jp](http://www.gnable.co.jp)

# グノOB 緊急 座談会

## 『受験時代とグノ、そして今の僕たち』(前編)

生徒たちに「塾って何のためにあるの?」と問えば、多くの場合は「目指す大学に合格できるようサポートしてもらうため」という答えが返ってくることでしょう。でも、グノーブルで学んだ生徒たちは、どうやらもう少し違った感情を持っているようです。グノレットの編集会議が行われたこの日、偶然4人の卒業生が中山先生を訪ねて遊びに来たのです。そのうち3人は、2010年11月にマサチューセッツ工科大学で行われた合成生物学のコンテストで銀賞を受賞したメンバーなんだとか。そこでさっそく、お目当ての中山先生を交えて緊急座談会を行うことになりました。

(取材：吉村高廣)

### 遊びに来てくれた卒業生

- かめい りょうすけ  
亀井亮佑くん 東大医学部 医学科4年  
(筑波大附属駒場出身)
- たにうち りょう  
谷内 稜くん 東大理学部 物理学科4年  
(神奈川県立多摩出身)
- はんた たけひさ  
半田剛久くん 東京医科歯科大 医学科4年  
(筑波大附属駒場出身)
- もりた ゆうすけ  
森田悠介くん 東大理学部 物理学科4年  
(筑波大附属駒場出身)

高校時代を振り返ると、  
必ず中山先生の顔が浮かぶ。

谷内：学校の場合は母校としてのカタチは存在するけど、先生は異動などで変わってしまいますよね。でも塾の場合はずっとそこに先生がいます。「会いたいな」と思った時はすぐに会いに行くことができます。

ただ、問題なのは、その先生と会って話をしたと思えるかどうかです。中山先生は、何かあった時真っ先に「会いたい!」と思える先生ですし、それを受け入れてくれる先生でもあるんです。

半田：今でこそグノは教室も立派になって、生徒の数や合格者も増えていますが、僕がいた頃は渋谷の教室なんてすごく小さくて、まるで隠れ家のようなところで密かに勉強している感じがあって、そんな部分に愛着があったんです。

医科歯科に入っただけにも遊びに来たことがあって、そのときは、大学で知り合いになった友人の中に何人もグノ出身者がいることがわかって、思わず嬉しくなったからでした。みんなで授業が終わる頃をねらって押しかけました(笑)。

中山：そうでしたね。医科歯科に進学した人が何人も一緒に来てくれて、他の先生方とも話し込んだり、写真を撮ったりしましたね。

半田：4月から5月だったと思います。医科歯科の定員はそんなに多くない中で、たまたま知り合ったメンバーの中に何人もグノ出身者がいて、結構びっくりしたんです。



でもそれが大手の塾や予備校だったら、受講生もたくさんいるのでよくあることだけれど、あの頃のグノってまだ“知る人ぞ知る”という塾だったので、そんなところで接点を持てたのがとても嬉しかったんです。

亀井：僕の場合はグノの授業がすごく楽しかったという印象があって、大学に入った後も「また中山先生に会いたいな」という懐かしさみたいなものがずっとあって、卒業後も顔を出させていただいています。

森田：僕は3人のように卒業後は熱心にグノに通っていないので肩身が狭いんですけど(笑)、確かに、中山先生の授業ってすごく密度の濃い授業で、高校時代のことを思い返すと何より最初に中山先生の顔が思い浮かびますね。

正直なところ授業ではしんどい思いもしたのですが、後になって考えれば相当ためになったと感謝しています。今日、谷内に誘われて来て、久しぶりに中山先生にお会いできて良かったと思っています。

習い始めの頃は、  
やっぱり少し恐かった…。

森田：今は中山先生と話していても、だいぶ肩の力が抜けるようになりました(笑)。高校時代はひたすら教わる一方で、とくに英語に関してはさすがなところもありましたし。

でも、高校時代に比べたら自分がしっかりしてきたところもあると思うので高校時代ほど緊張せずに今も話が出来ていると思います(笑)。

谷内：今はぜんぜん普通です(笑)。でも高校時代はやっぱり少し恐れてました(笑)。

高2からお世話になっていますが、中山先生はとにかく当てるんです。そこで自分が勉強していないことが明らかになってしまふ。でもまあ高3になってからは身を入れて勉強するようになって、授業中に当てられることもコミュニケーションをとる方法なんだと考えられるようになりました。



中山：谷内くんは高3になってから座る席が変わりましたよね。高2の頃は教室の後ろの方に座っていたけど、高3になってからは一番前か二番目くらいの席。

英語に対する意識が高2と高3とでは確かに変わって、主体的になっていたのかもしれないね。前の方の席だったから授業前には勉強以外のこともときどき話したのを覚えています。

半田：今は僕たちのことを専門分野に向かって進んでいる学生として見てくださっているのがよく分かるので、そういう意味では教わるばかりの高校時代と比べればある面対等に話せるようになったと思います。

でも、ある面では高校生の時の方が遠慮がなかったような気がします。授業が終わった後も先生の都合も考えずに遅くまで質問に答えていただいたりしていましたが、今は遊びに来て「先生もお忙しいだろう」とか気をつかってしまう部分もあります。でも自分も大人になりつつあるので謙虚になったし、1人の人間と

して、また人生の先輩として中山先生を見られるようになりました。

亀井：僕は高1からお世話になっていましたが、最初は質問に行くのもビクビクでした。ビクビクしながらも毎週必ず質問に行きましたが(笑)、でも中山先生はどんな質問にもイヤな顔ひとつせず熱心に答えてくれて、そうしたことを繰り返すうちにだんだん仲良くなったというか(笑)。

中山：亀井くんは授業が始まる30分くらい前になると必ず職員室に現れていましたね。実力が上がるに従って質問の量は減りましたが、高3の頃も気になるところは必ず聞きに来ていました。それが、実に深い質問で、こちらも本当に勉強になりました。

亀井：高3の頃はほんとに友だちのような気軽さで質問に行きました。今もそうした感覚の延長線上で中山先生とはお話しさせていただいています。

これが大きな塾や予備校だったら、最初のビクビク感すらなくて、先生が前で話しているのをポーっと聞いているだけだと思います。すごい先生が身近にいればやっぱり最初はビクビクすると思うんですけど、グノの場合、必ずそのうち打ち解けられるという良さがあると思います。

谷内：ビクビクするのは、中山先生は生徒の名前を覚えるのが早いからってことも。覚えられてしまったら、もう逃げられない(笑)。大きな塾なら生徒の名前なんて覚えられないしビクビクなんてしないもの。

亀井：確かにそうだね。それに中山先生は「先週、これ間違えたよね」なんてところまで覚えてる(笑)。

自分の話を聞いてくれる。  
そんな期待を裏切らない。

谷内：以前iGEM(※)で銀賞に入賞

したことを半田と一緒に報告に来た時、先生は授業が終わった直後でもお疲れの様子だったんです。

**中山：**えっ、そんなに疲れてた？

**谷内：**疲れてました（笑）。僕たちとしては人の話をいつでも真剣に聞いてくれるのが中山先生というイメージなので勢い込んで話をしたのですが、最初のうちはレスポンスが少なく「あれ、今は話すべきタイミングではなかったかな？」と思っていたら、先生が「それって生物のロボコンだね！」とiGEMの本質を突く発言をされて、それで一拳に熱がこもったんです。どんどん話題が広がって、その日も結局、深夜近くまでお話しできてすごく嬉しかったです。

根本的に中山先生は好奇心が旺盛な方で、何事にも食わず嫌いをしないところが豊富な知識の源になっているんだと思います。

**半田：**ほんとに授業中の話の引き出しは豊富でしたよね。あと知性を感じます。短絡的ではないというか、どんなことを聞いてもちゃんと考えて答えを返してくれるというか…。  
**谷内：**面白いものに対して関心が強いというか、専門性の高い話題が100%分かるわけではないとしても「面白い！」と言える鋭さをお持ちというか。

**亀井：**ほんとにそうだね。僕は中山先生に会いに来て、あまり専門的な医学の話をしようとは思わないけど（笑）、それはそれとしても、日ごろ大学の先生と話をするような感覚で、僕が面白いと思えることを「最近こんなことがあって」と中山先生には普通に話ができます。

**中山：**誰かが何かを楽しんでいるときには根拠がなく楽しんでいるということはないわけで、これをやっているワクワクするというものが背景にあるのだと思います。

たとえばiGEMの話なんかもそう

で、谷内くんも、半田くんも、話をするときの目がキラキラ輝いていたんです。私に深いところまで分かるかどうかは別として、まずは聞いてみて、自分でも楽しめるものだと分かれば、それは宝物を1つ貰うことと同じで、それだけ人生が豊かになるのかな、と思うんです。

それは学問の世界だけではなくて、芸術のことであれ、世界情勢のことであれ、たとえどんな分野でも、果たして自分の波長に合うかどうかは分かりませんが、見たり聞いたりする前から食わず嫌いをして「これは嫌い」と言って最初から排除してしまったり大きな損をするような気がします。だから積極的に話を聞こうと思っているんです。

**谷内：**なるほどなあ…。今、僕らがiGEMの話をした時に目が輝いていたとおっしゃっていただいたじゃないですか。先生はいつもそうしたところを見てくれるんですよね。でも人の生き方として、そっちの方が幸せですよ。

**森田：**いやあ、僕は自分があまりそういう人間じゃないと思うんですけど（笑）。でも、何事にも興味を持てる人って、その時点でもう若々しいですよ。感受性が今の僕と同年代の人と話しているのと同じくらい瑞々しいと思いますね。

**亀井：**僕もそう思います。さっき大学の先生と話をするような感覚と言いましたが、それもあるけれど、森田が言ったような同年代の感覚というところもあって、どこかアカデミックな友だちという感じもします。

**中山：**いやいやとんでもない。むしろ、授業で演習を行う時このメンバーの集中力にはいつも頭が下がっていました。

たぶんそれは英語だけではなくて受験時代であれば他の受験科目に対してもそうだろうし、また大学に入



半田 剛久くん (東京医科歯科大 医学科4年)



谷内 稜くん (東大理学部 物理学科4年)

ってからもそれがどういう分野であっても強烈な集中力を発揮するメンバーだと思います。

だから森田くんが何にでも興味を持てるタイプではないと言っていたけど、1つのことに集中して、そのことについて考え抜くという力は確実に持っているはず。そんな人たちに日ごろから出会っているからこそ私も、いざ生徒を目の前にしたらその時は「一生懸命やろう」と思っているんです。

### 世界にインパクトを与えた、iGEMでの東大チームの活躍。

**谷内：**iGEMというのはアメリカで行われる合成生物学の大会で、既存の生物生態を研究するのではなく、新しく僕たちが「こういうものを作りたい」と考えるものを生物で実現させるのが合成生物学です。

で、そのためには自分たちで遺伝

子を設計して、実際に生物の中に組み込んでみて、その生物がどう機能するかを実際に試してみて、そのアイデアや働きを競うのがiGEMというコンテストです。で、僕ら東大チームの研究発表は大腸菌に数独を解かせるというもので、銀賞を貰いました。

**中山：**大腸菌に数独を解かせるという発想自体がとってもユニークでインパクトがありますね。

**谷内：**発案者は亀井なんです。他の国のチームは人間や環境のためになるようなものだったり、大腸菌の新しい有効利用がテーマだったんですが、東大チームはもっと違った角度から世界にインパクトを与えようと思っていたんです。

**中山：**他の国のチームは大学院生が主体だったようだけど、なんで東大チームは学部生だけのチームだったの？

**谷内：**そもそもコンテストの制度上は「学部生じゃなきゃダメ」という



森田 悠介くん (東大理学部 物理学科4年)



亀井 亮佑くん (東大医学部 医学科4年)

ことはなくて、大学院生でもOKだし、研究室の教授が指図をして、学生たちが手足となって作業するというチームもありました。

中国なんかはすごくて、研究費も僕らの10倍以上ですし、メンバー登録していたのは15人ですが、裏には100人いると言われてました（笑）。

**亀井：**でも僕たちとしてはこの大会は学部生主体であるべきだと思っていました。そりゃ大学院生や教授がバンバン入って実験やればそれなりのデータになると思います。それに比べて僕たちの場合は、チームリーダーの谷内中心に企業との交渉などもやってお金も調達していたわけだし。  
**谷内：**人に助言されずに、自分たちだけでやりたかったんです。確かに金賞をとれなかったという結果を見れば悔しいですけどね。

**亀井：**でも自由にやれたのは良かったと思うけど。

**谷内：**うん。それが東大の強みだったかも知れないね。

**半田：**ちなみに僕は、大学の実習が休めなかったので日本に残ってアメリカに行ったメンバーのサポートをしていたんです。

**谷内：**でも半田はキーマンでしたよ。僕らがアメリカに旅立った時点では研究が仕上がっていなかったんです。で、僕たちはアメリカで発表の準備をしながら、日本に残った半田一人に実験をお願いしていました。

**半田：**アメリカにいるチームから連絡が来るんです。発表するのに足りないデータがあるから実験してデータを送ってくれ、とか。しかも時差の関係で、そういう連絡は決まって夕方に来て「次の日の朝までにお願い」みたいなシビアなリクエストが多くて（笑）。

**谷内：**そうそう。僕たちも時差を計算して「今なら学校終わったよね」

というタイミングを見計らってリクエストしていたんです（笑）。

でも、僕らも日本にいる間はアメリカに行く直前まで学校に泊り込んで朝まで実験というのを繰り返していました。

**中山：**夢中になって取り組んでいたんですね。

**谷内：**はい、すさまじく楽しかったです。

**亀井：**ほんとに楽しかったです。

**半田：**でも戦いのようでもあったよね（笑）。

**森田：**僕はiGEMには参加していませんけど、似た経験はあります。

今年の五月祭で、やはり大学に泊り込んで研究に取り組んでいました。

iGEMメンバーほどハードではなかったにしろ、結果がなかなか出ない焦燥感や発表を終えての達成感みたいなものはよく分かります。

**中山：**半田くんは東京医科歯科だよ。どうして東大チームに？

**谷内：**僕と亀井ともう一人キーマンとなる人がいて、みんなグノ出身なんです。そこで同じグノ生だった半田を口説こうかなど（笑）。

これは僕の勝手な考えだったんですけど、名目は東大チームとしてはいますが、バックグラウンド自体は一箇所に固めたくなかったんです。なので東大以外にも、医科歯科や早稲田、筑波、埼玉大とかのメンバーを集めて多様性を活かしたかったんです。

**中山：**なるほど。それにしても亀井くんの発想は面白いね。応用が効く科学研究が優先されやすい今の社会情勢だけど、それにしても、大腸菌に数独を解かせるという研究はいかにも意味がない（笑）。

**一同：**爆笑

**中山：**だけどそこが一番いいところかもしれませんね。アインシュタインだって初めから社会的責任に縛ら

れていたら発想に歯止めがかかってしまっていたはずで…。

若者の発想力というか、知の翼を自由に羽ばたかせて面白いことをやろうという考え方がすごくいいよね。  
**亀井**：そうなんです。iGEMが良かったのは、自由に発想できたことなんです。研究室で研究をするとどうしても範囲が決まってしまうんです。その研究室自体のテーマがあって、その関連テーマしか研究できません。

でもiGEMというのは、何をやっても良かったというのが大きな魅力でしたね。

**谷内**：さっき助言をされなくなかった、と言いましたが、研究室だけに固まってしまうとその研究室の先生の指導を仰がなくてはならないので、それが嫌だったんです。

でも、他の国のチームの中には先生の助言通りに研究を進めて、より精度の高い研究発表を行ったところもあったし、その中でプロの考え方を学べるというメリットもあったでしょうけどね。

**中山**：でも、そうしたアプローチだと経験となるものがまったく異なるものになりますね。

### チームワークの尊さを知った。その経験をどう未来に活かすか。

**森田**：物理の場合、今後の進路を考えると、理論か実験かという2つの選択肢があるんですけど、僕は五月祭の経験を通して学校に泊まりこんで実験するのが「すごく楽しいな」と思うところがあって「実験の方がいいな」と思いました。やっぱり、ああした無茶苦茶な生活ができるのは実験の方かなと（笑）。

**半田**：森田は無茶苦茶な生活がしたいんだ（笑）。

**森田**：いやいや、生活が破綻するのはいやだけど（笑）、僕は目の前に



あるものをどうしても見たいという欲求があって、そのために周りの雑音を気にせず集中できるのはやっぱり実験なんだよね。

**谷内**：僕も森田と同じで、iGEMをやる前から実験は好きでしたが、iGEM以前は、実験をするにも1人かせいぜい2人ですが、チームで実験をする楽しさを実感しました。深夜3時とかに研究室に行くと、いつでもそこで5、6人が同時に実験している。みんなが自分の役割を見つけて1つの目標に向かって突き進んでいくという姿はすごかったですね。ああした環境を経験したことは大きな影響がありました。

**半田**：それにいろんなバックグラウンドを持った人と一緒に過ごせたことが楽しかったよね。

医科歯科にも素晴らしい友だちはいますが、iGEMのメンバーはいろんなことを考えていて、コンテストが終わった後はそれぞれが自分の目指す道をさらに熱い気持ちで進んでいくんじゃないかなと思いました。

また自分の将来ということを見ると谷内が言ったように、チームで何かをやることの素晴らしさを実感しました。数独を大腸菌に解かせるというアイデアを思いついて、それを実現可能なところまで突き詰めていく亀井のような人がいたり、谷

内みたいにプロジェクトリーダーとしてまとめていく人がいたり、自分ひとりで大きなことを成し遂げられるという考え方が薄まってきて、それよりもいろんな面白いことを考えている人たちと結びついて、面白い仕事の中に自分の身を置けたらいいなと思うようになりました。

**亀井**：僕もiGEMで出来た仲間を通していろんなことを学びました。化学から物理までいろんな分野の人がいて、話してみると「ああ、こんなことを考えているんだ」という面白い話を聞いたことが良かったなと思います。

あと、合成生物学というのは、どちらかというとロボコンのように作り上げていくものです。かたや一般的な生物学というのは、そこにあるものの中をどんどん覗き込んでいくみたいなものなんです。で、今回合成生物学をやってみて、僕自身はやはり覗き込んで行く方が好きかなという気づきがありました。

### 妥協せず、徹底的に集中する。それは研究も受験も同じこと。

**亀井**：僕は大学に入ってすごく丸くなったと思います（笑）。

**森田**：亀井のことは小学校から見えますけど、確かにだいぶ丸くなった

と思います（笑）。

彼ってものすごく完璧主義者だったんですよ。で、ちょっとしたミスがあっても自分に対してそれが許せない。そういうところから独特のオーラというか「すごいな」という雰囲気が出てたんですね。

僕は自分に対してそこまで厳しくなれないんですけど、彼の場合は「そこまでしなくてもいいんじゃないかな」というところまでやる。

**谷内**：亀井は医学部で僕は物理で、まったくバックグラウンドが違うんです。それがiGEMという1つの目標を目指す中で、亀井が面白いと思うポイントと僕が面白いと思うポイントが全く違うんです。「なんでこれが面白いのか僕には分からない！」と（笑）。

そこでけっこうすり合わせに時間がかかったんです。初めのうちは言い合いにもなりましてし、お互いにどうしてもゆずれないところもありましたね。本人は丸くなったなんて言ってますけど、「ほんとにかよ」って感じですよ。

**亀井**：それはお互いさま（笑）。

**中山**：そんな2人の姿を半田くんは間で見ているどうだったの（笑）？

**半田**：この2人に限らないでiGEMのメンバーはいい意味でみんな負けず嫌いでした。うやむやなうちに

妥協することがなくて、むしろそんな頑固さが僕はいいなと思っていました。自分が納得できることをやりたいとみんな思っていたし、僕もそんなふうになっていましたね。

**中山**：多分みなさんはクロノス時間とカイロス時間のことをご存知だと思いますが、クロノス時間というのは時計で計れる時間で、たとえば「もう1時間たったから、そろそろやめましょう」みたいなものです。

カイロス時間は人間の内的な時間感覚で、時計では同じ1時間でも、心の中では長く感じられたり、あつという間だったり。で、クロノス時間で取り決めをしている限りiGEMのようなプロジェクトは先に進まなさそうです。常識的に考えれば「いったいつまでやっているんだ」という時って、きっとメンバーの頭の中はとても活性化されていて、時間が来たからおしまい、というわけにはいかないでしょう。

で、皆さんの話を聞きながら「この時間感覚ってグノーブルの授業と似てるな」と思ってしまったわけですよ（笑）。

**一同**：爆笑

**中山**：グノーブルの授業が毎回延長になることの言い訳ですけどね（笑）。ところで今思ったんですけど、このメンバーが授業中につまらなそうな

顔をしていたのはちょっと記憶にありません。授業では理系寄りの英文だけでなく、文系寄りの英文もたくさん扱いましたが、いつも熱心に演習に取り組んでましたし、解説に耳を傾けてくれていましたよね。幼い頃からの習慣で培われたのか、皆さんには長時間集中力が持続する、「知的体力」といったものが備わっているのかもしれないね。

それと、谷内くんと亀井くんが、相手の言ってる面白さが分からないという時に、「まあリーダーが言ってることだから聞いてあげようか」とか「発想者が言ってるんだからこれでいこうか」とはならなかった点も素晴らしいですね。

**谷内**：でも、それだから、ほんとに時間かかりました。最後の最後、発表の直前までプレゼンをする人と亀井との間で意見がまったく合わなかったし…。

**森田**：なんだ、やっぱりぜんぜん丸くなってないじゃない。結局、亀井の完璧主義ってところは変わってないんだ（笑）。

**一同**：爆笑

（次号に続く）

後編では、大学に入りグノで学んだ英語がどう活かされたのか。また、彼らが将来目指すもの。などを紹介します。

#### ※iGEMと東大チームの活躍

正式には International Genetically Engineered Machine competition という合成生物学のコンテストです。2010年11月マサチューセッツ工科大学で開催されたこのコンテストにおいて、理学部を中心として、工学部や医学部、他大学の学生を含む「iGEM 東大チーム」は、大腸菌に数独を解かせるという極めてユニークなアイデアを研究成果に結びつけ銀賞を受賞しました。また、イギリスの一般向け科学雑誌New Scientistの記事として取り上げられるなど、海外メディアからも注目を集め、話題となりました。





GSLのナレーター  
クリス・コプロウスキさん

# GSL

## (グノーブル独自開発音声教材) 音録り現場ルポ

グノーブルの英語が高い評判を得る背景には、生徒たちの興味を惹きつけてやまない先生たちの授業力やテキストやプリントの良さが挙げられる。ただし、どれだけ優れた教材を使い、ワクワクするような授業を受けたとしても、きちんとした自学自習の習慣が身につかなければ“使える英語の土台づくり”は行えない。グノーブルでは、その一翼を担っているのが独自に開発した音声教材GSL(※)だ。今回は、GSLの音録り現場にお邪魔して、グノーブル発足当時からこの音声教材の開発にたずさわる関田先生にお話を伺った。(取材：吉村高廣)

『一発音問題対策講座』とリンクしたものだということだった。

録音が始まると、事前の打ち合わせの通り、テンポ良く収録が進んでゆく。ナレーターの方もミキサーの方も、もう何年も一緒に音声教材の作成に参加してきたという。長年仕事をともにしているチームとしての一体感を、録音現場で感じた。

そうした中で、録音中に関田先生が頻りに「言い直し」を要求するのには驚いた。いかに英語の先生とはいえ、相手はネイティブで、しかもプロのナレーターである。ナレーションを間違えたわけではないのに、ナレーターに何度も指示を出していた。録音後理由を聞いたところ、「日本人はとかく遠慮しがちですが、失礼になることなく自分の考えを相手に正確に伝えることは、絶対に必要です。英語を学ぶことの効用の一つは、英語圏の人の考え方を身につけることができることです」とのことだった。

2時間に及ぶ音録りの間、難度の高い英文は一切出てこなかった。英語の発音の“基礎”を徹底的に学ぼうというのがこの講座の目的であるようだ。

それにしても高3の夏になってアルファベットの発音から学び直すというのはいかかなものか…しかしながら、センター試験ではここが落とし穴になるのだと関田先生は話し始めた。

### 原理原則を知らずして、 英語の土台づくりは成しえない。

驚かれましたよね？センター試験対策というのに、いきなりアルファベットの発音から入るんですから。中学1年生のGSLと思われても不思議はありませんね(笑)。

でも、アルファベットの発音は、英語の発音を学ぶ上で基礎となるもので、それをセオリーとしてしっかり把握できているか否かで、そこから先の学習効果はまるで違います。

ところが残念なことにその原理原則を理解できていない方が多く、学校でも発音を体系立てて習うことが無いために、センター試験で失点してしまう場合が少なくあ



緊張感あふれる録音前のミーティング

りません。ですからこの講座では、あえてアルファベットの発音から入り、英語の発音の土台を固めようという目的があります。

現在のセンター試験は200点のうち14点が発音問題の得点に割り当てられています。結構大きな得点比率ですので、ここを取りこぼしてしまうともったいない。そうしたことがないようにと企画したのがこの講座です。

センターの発音問題対策を目的とした参考書や問題集は書店に行けば見つけることはできます。しかしながら、私自身で可能な限り調べてみたところ、原理原則に基づいて発音やアクセントにアプローチしているものはありませんでした。多くの場合、紙面上に書かれた発音やアクセントについての膨大なルールとよく出題される語を丸覚えしようというもので、勉強方法として非効率的です。

一方今回の新講座では、発音やアクセントの原理原則をしっかりと身につけていただき、なるべく少ないルールを理解し、そこから問題が解けるよう講座全体の設計をしています。そしてそれをネイティブの音声を使って正しく身につけるのが、今日録音したGSLの役割なのです。



クリスさんに意図を伝える関田先生

### GSLにどれだけ長く接したかで、 英語力に大きな差がつく。

GSLは、中学1年生から高校3年生まで、それぞれの学年、全ての授業で使用されるテキストやプリントとリンクして開発されている。1度授業で学習したことをネイティブの発音する音声を聞き、口まね、音読を繰り返すことで、授業で理解できたことが身につく、英語を語順のまま解釈できるという、極めて合理的な“自習音声教材”ということができるだろう。

これまで取材してきた東大合格者の全てが、GSLを絶賛していたことにも裏づけられる通り、その効果は多くの先輩たちが実証済みだ。しかしながら「ただぼんやり聞いて、口まねしていればいいわけではありません」と関田先生は釘を刺す。

GSLの学習効果を信じて活用していただければ、必ず英語力は向上していくと自信をもって申し上げられます。でもそのためには、何十回も繰り返し聞き込んで、

聞き取れるようになったら口まねをして、それに慣れてきたら今度は実際に発声してみる。そして最後は音声に頼らず自分ひとりで音読するというのを習慣にしないことにはなりません。要は、どれだけ長い時間GSLに接しているかで英語力に差がつくのです。

事実、中学1年生からGSLに真剣に取り組んでいる生徒と、高校生になって始めた生徒では明らかな差があります。

中学生のGSLは、新中1スタートダッシュ講座(アルファベットや基本的な英語と日本語の違いを学ぶ講座)以外は全て基本例文を扱っています。逆に高校生になると高1からいきなり長文の音声に変わるため、高校から始めた人は基本例文が頭に入っていないぶん最初は苦労することになります。

また、基本例文が頭にストックされていることによる構文理解もさることながら、早い時期からネイティブの発音に慣れているという点においても大きな差が生まれるのです。

そもそも言葉というものは音声ですので、音声なくして英語の学習をしようとすること自体がナンセンスだと私は思っています。今回の『セン

ター発音問題対策講座』や、中3の冬以降に入塾される方対象の『EGGS』という文法の初歩講座など、新しい教材を作ると、それを必ずGSLとリンクさせます。今後も皆さんの英語力向上に役立つ教材を提供し続けて参ります。

### GSL(※) GSL (GNOBLE Sound Laboratory)

★本格的な英語力を培(つちか)うには日常的に聴解力を鍛える生活習慣が特に大切。

『耳を鍛える』ことでリスニング力はもちろんのこと、読解力も、語彙(ごい)力も、英語の瞬発力も飛躍的に伸ばせます。

★グノーブルでは、独自の音声教材GSL(GNOBLE Sound Laboratory)を開発しています。

ネイティブの美しいナレーションにより、基本単語や例文中心の中1から、高度な内容を収録した高3に至るまで、6学年すべての生徒に質の高いコンテンツを提供。聴き込み、口まね、音読、シャドーイングなど、合理的な練習方法も整備しています。

★もちろん肝心の皆さん自身が“その気”にならなければ学習効果は期待できません。

でも、グノーブルで学べば大丈夫。私たちは“意欲作り”にも自信を持っています。



2011年 東大理科Ⅲ類合格 安田陽平くん執筆

『僕はこうして理Ⅲの門をくぐった！  
勉強法大公開』第1回やすだ ようへい  
安田陽平くん(東大理科Ⅲ類1年 栄東出身)

## 志望校に不合格。中学受験の挫折。

こんにちは。今回からコラムを書かせていただくことになった、東京大学理科Ⅲ類1年の安田陽平です。第1回目ということで、今回は僕という人間が理Ⅲにたどりつくまでの経緯はどのようなものであったか、僕というのはどういう人間かということを書きたいと思います。

まず、中学受験にまでさかのぼってみようと思います。当時、僕は、受験勉強にそこまで身が入りませんでした。そして結局そのまま、第1志望の武蔵中学や、名門の海城中学には落ちてしまいました。海城の合格発表で、発表帰りの小学生たちに「合格おめでとうございます」といって、指定校制の塾のチラシを配布してくる人がいて、僕ももらって腹が立ったのを覚えています。まあ、勉強不足という意味では自業自得なのですが(笑)。結果的に、模試の判定は出ていなかったものの、なんとか合格して、以前からいい印象も持っていた栄東中学という中高一貫校に入学することになりました。

## 中学時代が嘘のように高校でブレイク!

さて、期待に胸を膨らませ、門をくぐったものの、僕を待ち受けていたのは初の中間テストでクラス27人中21位という衝撃でした。その時は「まずい」と思いつつも、硬式テニス部で練習に打ち込んだり、土日は毎週のように友達とカラオケに行ったりしてすごしました。英語はちょこちょこはやっていたものの、ほかは全然で、僕がいた東大選抜クラスでは「2番目に勉強していない」と担任によく怒られていました。中学時代はこんな調子で、最後のテストも確か20位台で、とても東大を目指す成績ではありませんでした。

しかし、高校入学を境に、僕は勉強するようになりました。きっかけは「5位以内に入れたら何か買ってやる」と父に言われたからだったと思います。僕は見事につられ、高校初の中間試験に初めて試験勉強らしい勉強をしました。しかし結果は8位。それでも1桁をとれたことが自信につながり、次はもっといい成績を取ってやろうと思いました。このとき僕は初めて勉強に目覚めました。一旦1桁台をとったら、もう2桁なんて絶対嫌でしたから(笑)。

高1も終わる頃になって、あるとき僕は、偶然と努力が重なって、定期テストクラス3位という快挙を果たしました。僕のクラスには不動の1、2位がいたのですが(二人とも東大に進学しました)もしかすると「自分は彼らに勝てるのではないか」と思うようになり、ますます勉強に力が入るようになりました。負けず嫌いだったので、勝つために猛勉強しました。そして僕は塾探しを始めたのです。

## トップを競い続けたライバルに感謝。

当時は数学にはまっていたので、数学を武器にしたいと思い、クラスの担任にすすめられた数学の塾を見に行くことにしました。で、道に迷いました、方向音痴なので(笑)。そこでグノの警備員さんを見かけ、ふらりと寄ってみたのがグノとの運命的な出会いだったのですが、グノの話はまた次号以降に。

ともかくそれで僕はグノに入り、英語と数学を中心に成績をあげていきました。定期試験では3~5位は安定して取れるようになりましたし、実力がついてきているのも実感できました。実際、なかなかあがらなかった模試の成績も、この頃はかなりよくなっていきました。そして、自分なりの勉強のスタンスを確立しているうちに、僕はとうとう中間で1位を取りました!高2の二学期だったと思います。その達成感たるや、想像を絶するものでした(笑)。

以後は彼らと何かにつけて競り続け、受験までモチベーションを切らさず勉強できました。高2では、彼らの一人と一緒に数学オリンピックに挑戦してみたり、高3では、模試でもう一人になかなか勝てなくて悔しい思いをしたりと、なかなか青春っぽい(笑)受験生活を送れたと思っています。

※

僕は、いわゆる超名門進学校の生徒ではありませんでした。しかし、周りにレベルの高い競争相手がいたこと、自分なりのやり方で努力を重ねていったことで東大の理Ⅲに合格することができたのだと思います。次号以降で紹介する、具体的な勉強法やメンタル面、時間の使い方など、そういった視点で参考にしていただくと幸いです。

GnoTube

先輩たちの本音を知れば、  
グノがもっと好きになる。  
東大がぐっと近くに思えてくる。

2011年 東大合格者の肉声を、『GnoTube』でぜひ!

毎年恒例となっている、東大合格発表直後の『合格者座談会』。

今年の5期生は、理系10名、文系8名と、今まで以上に多くの卒業生たちが参加してくれました。グノ在籍中は、良きライバルとして切磋琢磨し、互いに実力をつけて見事合格を勝ち取った先輩たちの言葉は、何ものにも勝る説得力があります。ぜひアクセスしてチェックしてみてください。元気が出ます!



2011年文I~理IIIまで、全科類の東大合格者が語る東大受験の真実!

[www.gnoble.com/gt/](http://www.gnoble.com/gt/)
晴読雨読  
この一冊

『復興の精神』

「これから」をどう考えるか。3・11以降を生きる杖。

2011年3月11日を境として、日本人のモノの考え方や価値観が大きく変わった。これから私たちは、何を考え、何を行い、どう生きていくべきなのかを真剣に考えなくてはならない。もちろん、自分の生き方のみならず、社会の一員として「自分に出来ること」にも思考を向け、行動に移すことが求められるのだ。そしてそれは、今、社会を動かしている大人たちだけでなく、これからの日本を担っていく若者たちにも、より強く求められるテーマに違いない。そんな、これからの日本を生き抜く知恵やヒントをこの本は授けてくれる。養老孟司 茂木健一郎 山内昌之 南直哉 大井玄 橋本治 瀬戸内寂聴 曾野綾子 阿川弘之といった「知の巨人」たちが語り、記す言葉の中に、きっと希望の光を感じることが出来るはずだ。

新潮新書  
(700円/税別)

## 編集後記

進学塾といっても、それはただ大学に合格するためだけのものではない。今回の『OB座談会』に参加してくれた卒業生たちと話をし、そのことを改めて実感しました。受験期というのは、ある意味で最もナイーブな気持ちが育まれる時期かも知れません。そんな時だからこそ「誰と出会ったか」で、その後の人生に何らかの影響を及ぼすのです。また座談会の後日、今春、筑波大医学群医学科に入学した栗木あかねさん(筑波大附属出身)が、首席合格だったという嬉しい知らせを持って中山先生を訪ねてきたと伺いました。確かに「受験でお世話になった」という気持ちもあるのですが、そうした通り一遍の気持ちを越えたところで、彼女らはグノープルとより深く結びついているに違いありません。

(編集責任: 吉村高廣)

